

先に加賀藩から英國に留學を命ぜられた伍堂
車爾が交渉來航せしめ、淺津富之助後南郷が、
金澤藩知事代理として兵庫に於いて契約した
もので、月俸墨西牙銀三百五十弗に相當する
邦貨であつた。明治四年七月鑛山學所の廢止
と共に、デッケンは解約せられた。

テツザンシカク 徹山旨廓 曹洞宗の僧。

珠巖道珍の法を嗣いで石川郡大乘寺五代に住
し、移つて同郡承天寺二代となつた。永和二
年七月十日に示寂し、承天に塔した。

テツシユウ 徹周 ↓セキソウテツシユウ
石叟徹周。

テツシンドウイン 鐵心道印 金澤曹洞宗

天徳院の住持。同寺では之を二代とせずして、
單に前住としてゐる。伯耆河村郡の人。十二
歳龍徳寺の松庵受念によりて出家し、關東に
赴いて徧く禪席を訪ひ、信濃大昌寺・美濃龍
溪寺に住し、遂に加賀の天徳院に移り、同國
等覺・桑山二寺を創立した。後和泉に隱棲し、
小林山陰涼寺を開き、延寶八年正月廿八日八
十八歳を以て寂した。

テツツウギカイ 徹通義介 越前足羽郡の

人。幼にして同國波着寺の懷鑑に就いて得度
し、次いで比叡山に登つて具足戒を受け、仁
治三年深草の興聖寺に至つて道元に講し、道
元の越前永平寺を創めるや亦之に従ひ、恩師
示寂の後孤雲懷奘に依附してその法嗣とな
り、正元元年宋に入り、四年を経て東歸し、
文永四年永平寺三代に晋んだ。同九年退位、
山中に養母堂を結んで居ること二十年許。正
應二年加賀の富樫家尙の屈請する所となり、
野々市の大乗寺を改めて禪院となし、乾元元
年之を鑛山紹瑾に譲り、延慶二年九月十四日

寂した。世臘九十一。墓は野々市の西天滿宮
の後方なる大乘寺の遺址に在る。

テツボウ 鐵炮 萬治二年正月六日の令に、

『鐵炮打候儀、如跡々四月朔日より七月晦日迄
は、居屋敷之内にて爲稽古的打申儀は、御赦
免被成候。但植木にとまり候鳥は勿論、あげ
星・射越など無之様に隣へ遠慮可仕候。』又寛

文三年六月三日の令に、『犀川櫻島之下がけ、

淺野川觀音山之下兩所にて、御家中之者共並
に又者等鐵炮稽古仕、居屋敷之外於所々鐵炮
打候儀堅御停止候云々。』など、見える。又是
等舊式の火繩銃炮術には豊島・酒井の二流が

あり、豊島流は豊島氏、酒井流は中島氏之を

傳へた。その銃には長短數種あつて、その最
も長きを長筒、之に次ぐを修羅筒、最も短き
を異風筒と稱した。

テツボウアラタメビギヨウ 鐵炮改奉行

御領國鐵炮奉行は、元祿元年二月廿九日神尾
伊兵衛直保・里見七左衛門元茂の命ぜられた
のを初見とする。同年直保歿し、二年四月十
二日御歩頭神尾孫九郎直一・御先手物頭平田

清左衛門成恭命ぜられて三人となり、元文の
頃までその通りであつたが、寛保中から一人
役となり、大組頭・御持方頭から兼務するこ
とに成つた。

テツボウイシ 鐵炮石 珠洲郡川浦なる庄

司川の河口海中から、小孔の貫通した礫を打
上げる。硃質で、鐵炮石とも緒占石とも呼ば
れ、その成因は高師小僧と同一であるといは
れる。

テツボウチゾメ 鐵炮打初 ↓イヅメ

射初。
テツボウコウ 徹法考 一冊。 奥村榮實

の著。周室の田法兵賦の説を録したもので、
別に徹法考圖が添へられる。また徹法考解の
外題をもつものがあつて、それには文政十一
年の自序が附加してある。

テツボウモノ 鐵炮之者 ↓アシガル
足輕。

テツボウビギヨウ 鐵炮奉行 御鐵炮奉行

の始は明らかでない。萬治二年十一月丹羽八
右衛門、寛文二年二月十六日井上太郎兵衛・

水越平左衛門・飯山庄兵衛、延寶七年三月岡

野半兵衛が命ぜられ、以來御異風より之を勤

めて連綿した。御鐵炮奉行は藩の所有する鐵
炮を主管する者である。

テツボウマチ 鐵炮町 金澤の舊町名。元

祿九年の地子町肝煎裁許附に、嶋田勤兵衛上
地町の次に鐵炮町とあるが、此の町名は後に
絶えた。往時鐵炮足輕の組地であつた、めの
稱であらう。

テツボウマチ 鐵炮町 金澤の舊町名。大

工町の横小路で、今は池田町一番丁・二番丁
と呼ぶ。藩政中その一番丁は御先手組鐵炮足
輕、二番丁は割場附足輕が住したが、初は兩
丁共に御先手組鐵炮足輕の組地であつたので
ある。

テツランムテイ 鐵監無庭 石川郡曹洞宗

大乘寺五十四代の住持。弘化元年八月十三日
寂した。

テドリ 手取 石川郡長屋庄に屬する部落。

テドリガハ 手取川 (一)水脈一源を大汝
岳に發し、御前岳西部千丈瀧の下流を併せ、釋
迦岳の東を流れ、湯谷川となつて市瀬に至
り、こゝに柳谷川と會したるものを牛首川と
も白山川とも言ふ。その柳谷川は御前岳の南

に發し、別當谷川及び赤谷川を受け、亦三
峰に源を發する岩屋俣川を容れたるものであ
る。牛首川は市瀬より西流し、白峰小字赤
谷に至つて、越前國境赤鬼山(地圖赤鬼山)に
發する三谷川を南より入れ、更に北流して二

三の溪流を併せ、小字河内谷に至つて西北に

折れ、風嵐に達する。この所で南方より風嵐

谷及び明谷の溪流來り會し、白峰に至つて又
南より來る大道谷川を入れ、次に東より百合

谷の溪流を、桑島の北方で大嵐谷川・小嵐谷
川を合はせ、西より赤谷の溪流と下田原の溪

流とを受け、深瀬より北流すること約八軒

で、石川郡木滑新に至り、尾添川を容れて初
めて手取川の名を得る。水源よりこゝに至る

まで流程四二軒。木滑新以北手取川の本流は、
北に向かうて市原を過ぎ、大笠山の西麓から

發する瀬波川を入れ、更に北流すること四軒、
能美郡河合小字上河合に至つて、左岸より大

支流大日川を併せる。それより稍東北に流れ、
黃門橋に於いて幅二五米の峽流をなし、石川

郡口直海の北で右岸より直海谷川の支流を入
れ、水量益加り、鶴來附近に至れば左岸に凝

灰岩より成る天狗壁の勝地を見、こゝより西
に折れ、河幅忽ち増大して所々に砂礫の洲を

挟む。本川の末端は、海岸砂丘の爲に妨げら
れて北折し、湊美川の間を過ぎて海に注ぐ。

大汝岳よりこゝに至るまで流程七七軒に及

び、河幅の最も廣い所は、能美郡栗生附近に
於いて一軒餘に達するが、その上流は磊々た

る岩石河床に横たはるが故に、小舟を通じ得
る距離僅かに一〇軒内外に過ぎぬ。而して夏

秋霖雨の際には俄に暴溢して堤防を破壊し、田

圃人畜を害ふことが屢である。